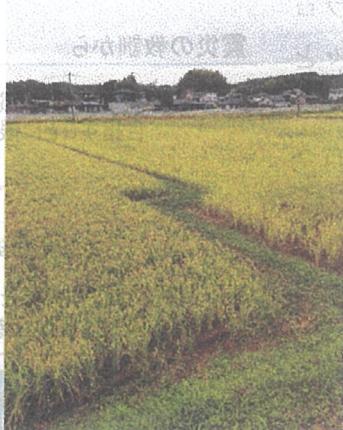


轍わだち 2022.11.11 NO.149

## 中学3年生研修旅行：熊本県益城町を訪ねて

平安女学院中学校の3年生は、研修旅行で長崎県と熊本県を訪れました。戦争による核兵器の怖さを学んだ後、10月27日は熊本県の益城町（ましきまち）を訪れ、地震によって生まれた横ずれ断層を見学しました。写真では田んぼのあぜ道がクランク状に折れ曲がっているのがわかります。

熊本地震（2016年）が発生する前はまっすぐだったそうです。益城町の陳堂園地区では「布田川（ふたがわ）断層帯」が横断していて、東西方向に最大2.5メートルのずれが確認されています。益城町と熊本大学などの研究グループによると、この活断層は7300年前から現在まで、大地震を少なくとも2回発生させていることが判明し、およそ2000年周期で起こっているそうです。



↓漫画「ONE PIECE」と連携した復興プロジェクト



↑ 熊本地震が起きたときはまだ小学3年生だったけど、衝撃的なニュースだったはず

10/27 益城町 防災プログラムを受けて (中学3年生 小林茉子さん)

熊本県益城町の断層見学では、地震によって大きくずれた地面を見ました。同じ地震の大きさでも地面が大きく動いたところではたくさんの家が倒れたけど、地面があまり動いていないところはほとんどの家が倒されずに済んだ。または地面ごと元の高さよりも下がってしまったことを初めて知り驚きました。熊本地震から6年半が経っても熊本城ではまだ修復できていないところがたくさんありました。熊本城が完全に元通りになるのにあと16年もかかるそうです。今回の研修旅行で、あらためて地震の怖さや地震による被害をどうやったら少なくできるか考えることができました。

# 中学2年生総合学習：住み続けられる町づくりモデル（宮城県女川町）

平安女学院中学校の2年生は、「SDGs 11：住み続けられるまちづくりを」を目標にした取り組みを知るために、10月27日、宮城県女川町（おながわちょう）の公民連携室に勤務している青山さんのお話を聞きました。東日本大震災（2011年）の巨大津波によって壊滅的な被害を受けた女川町をどのように町を復興させてきたのでしょうか。

被災直後の状況や様子の説明を聞くと、单にもっと高い防潮堤を作るべきとの意見もあったかもしれません。しかし、強固なものを作ろうとすれば膨大な資金や年月が必要になります。そして町の景観も変わってしまいます。

そのために必要な考え方が「コンパクトシティ」です。住まいと生活機能（交通や商業施設）が効率的に結びついたまちづくりのことを指します。人命を優先するため、住宅は高台に移設、JR女川駅から湾にまっすぐ伸びたプロムナード（遊歩道）は海の様子がはっきり見える広々とした配置になっています。（上に掲載：夕日の写真）

人々が津波の危険から命を守るには、気付いたら高台へすぐ逃げる行動こそ大事です。完璧な防災ではなくても、知恵と技術を合せて「減災」を目指すことによって新しい復興の形が作られていることがわかりました。

10/27 女川町の復興とまちづくり  
(中学2年生 吉田 妃菜音さん)

## 東日本大震災 被災状況



震度 6弱(女川町)  
最大津波高 14.8m  
最大遡上高 34.7m

当時の人口 10,014人  
死者・行方不明者  
827人（人口比 8.3%）  
建物被害の被災率  
住家 89.2%  
非住家 77.7%



## 震災の教訓から

START! ONAGAWA

震災の教訓から防潮堤などで完璧な防災を目指すことに限界があることが分かった



## 女川町復興計画 基本理念

町民の皆さん命を守る「減災」という考え方を基本として、豊かな港町 女川の再生を目指します

住まいは安全な高台へ・海とのつながりも大切  
地震がおきたら高台へ逃げる

私は、女川町はとてもすごいなと感じました。津波は約25メートルで4階の建物が隠れてしまうくらいの大きさで、波にのまれてしまったにも関わらず今ではもう家が立って、再び漁業をして町を活性化させていてすごいと思いました。私たちと同じ年の中学2年生が、親や、兄弟をなくしたのに、次の世代の子どもたちのために行動していてとても尊敬しました。講演の中でおっしゃられたように、誰かがしてくれているからこそ「今」がある。「全ての人に感謝」しないといけないと思うようになりました。

今年も宮城県の被災地にクリスマスギフトを送ります！  
メッセージカード作りにご協力お願いします。

